大好き！壱岐！紹介「しまおこし人」

vol.3

勝本町・鬼塚力さん（63）

「大好き！壱岐！紹介『しまおこし人』」、このコーナーは、「愛する壱岐の島の島おこし、今以上に住みよい島になっていくために、何か役立てる自分でありたいと、様々な活動や行動を起こしている若者たちや市民を紹介するコーナーです。

――＊――

第3回目の今回は、「地域とのかかわりを深めながら、自分でできることを通して地域の活性化、人通りの復活に役立てればと思う。そこに向かって動いていきたい」などと話した郷ノ浦で「洋食と珈琲の店トロル」を経営するオーナーシェフ・中山貴史さんからの紹介で、勝本町、鬼塚力さん（63）。

徳力のおんちゃん

ボランティア団体・チーケ愛好会、舞踊など多くのステージに登場し、トランペットを颯爽に気持ちよさそうに吹くあの「おじさん」が、湯ノ本で「やきとり・お食事処　徳力」を経営する「徳力のおんちゃん」こと鬼塚力さん。「本名より徳力のおんちゃんの方がみんなへの通りがいいし、すっかり定着してるしね」と笑顔で話す。

50年間愛用のトランペット

トランペット

高校の頃、友人のトランペットを借りて簡単なメロディーと童謡などを、全くの自己流で吹き始めたのが始まりで、途中、ゴルフにはまっていた頃もあったが、腰を痛めてから、6,7年前から再度トランペットに夢中になり、市内有数のロックバンド「KUMAバンド」のコンサートに出演させてもらったのを皮切りに、今では様々な催しから声がかかるほどで、本人いわく「カンレキ・マドンナ」というファンのグループも。

初ステージの時、KUMAバンドのメンバーから言われた言葉「若くても年をとっても、音楽は一緒にできていいね」の一言に感激、今でも忘れられない言葉になっているという。愛器は50年間は使っているという旧「NIKKAN（ニッカン）」製のものとヤマハ製の2台。

音楽の祭典

音楽にはジャンルがあって好き好きがあり大変かもしれないが、将来、1日楽しめる「音楽の祭典」が開けないものかと考えている。その時まで元気にラッパを吹きながら、高齢者や障害がある人たちを癒したり励ましたりする活動を続け、仲間たちと音楽、文化度を高められるよう頑張っていきたいし、行政に島民の音楽活動に対する何らかの援助、一層の理解が得られるよう尽力したい。

猿岩・夕焼けコンサートで

加えてこんな活動が、島外の人たちの心に引っ掛かり訪ねてもらえるようになればと思っています。

鮒

～コラム～ 心の形（3）

文／松原 湊

さかな釣り ― 2 ―

少年は糸をたぐり寄せ、魚を地べたに置いて初めて笑みを見せた。歳が離れていたので名前も知らなかったが、たぶん少年は漁師の子ども。

少年のその笑顔に安心感を覚え、私はその魚の近くによって見ることが出来た。銀色が美しい鮒であった。のどから手が出そうなくらい、その鮒が欲しかった。

今では考えられないほど引っ込み思案な当時の私は鮒に触れる事もせず、ただ鱗の美しい並びと大きな目に心を奪われていたその瞬間、少年は素早い手つきで針をつかみ同時に魚を持ち上げて揺らした。鮒は池に落ちて泳いで姿を消した。

私はなんで逃がすんだという表情を浮かべ「あぁ」とだけ発した。少年は一言「食べられん」そう言った。その言葉の調子を少し怖いと感じた私は、再び弟の手を引き早足で林道を抜け家に着いた。

弟の前だけでは強気な私は、水道で泥を流しながら「まだ見たかったか?」などと言いながら、少年の怖さと鮒の魚体に興奮するする心を抑えた。今から思えば、それが釣りを始めるきっかけになったのだと思っている。・・・それからと言うもの、私の頭の中は鮒の事ばかり。

小学低学年の頃だったと思う。授業中も池で見た少年の仕掛けや動きを想い出しては妄想し、時に担任の先生に名前を呼ばれ、ふっと我に返る時もあった。家では父親の顔を見るなり鮒について色々と質問した。雨の日曜日には、窓ガラスの外側が濡れる縁側で弟と二人、鮒の絵を描きながら得意げに「かっこよかろうが?」などと言っていたのを覚えている。

弟が鮒の絵を描くのに飽いた後も、私は「庭先の水たまりに鮒がいたらどんなに素敵だろう」と一人妄想に心を泳がせていた。

（つづく）

撮影　aburayamayu

壱岐新報川柳

壱岐川柳会

4月 兼題「嬉しい」松永扶巳 選

病室を空ける退院でも嬉し　絹代
退院の空に羽ばたく千羽鶴　健人
合格の携帯メールに一家湧く　ふみこ
嬉しいね孫がささやく散歩道　久恵
嬉しがらせる風も罪だと花嘆く　緋呂子
嬉しさも悲しみも分け三姉妹　星舟
紫陽花の喜びがある恵み雨　伸吾
梅香る夢の叶った　お札絵馬　伸吾
自分史に嬉しさだけを飾りつけ　伸幸
親からの遺産と思う姉妹居て　春菜
初孫に無骨な顔が錠びる　伸幸
嬉々の母　心の振り子が大揺れで　緋呂子
さくら咲く嬉しい嬉しいメール来る　漣
鬱の午後親友全快の便り来る　篤世
定年日嬉し淋しい朝が明け　甫釧
初産に妻の安堵の瞳に浸る　ゆたか
うれしさはひとりになって目をつむり　愛郷
嬉しいと素直に言えぬ漢の背　篤世
親父似の指嬉しくもありおかしくも　幸子
佳　父愚直うれしいことを後ろ向き　愛郷
佳　先頭のうれしい風を眉に受け　甫釧
人　膝痛も忘却のなか信号機　春菜
地　嬉しさを胸に満たして月仰ぐ　ゆたか
天　破顔一笑　漁師の赤銅色の顔　伸吾
軸吟　嬉しさをかくしきれない靴の音

あしべ文芸第211号 短歌作品集より

あと少し土寄せたしとねぎ畑つるべおとしの陽は暮れはじむ　村田裕子

のど自慢被災地からの熱唱にえみうかべたり涙したりす　木下春江

早朝に厨に立てばガラス越し茂みに映えるピンクの山茶花

帰省せる孫子にさそわれ島内のガイドブックで古跡めぐりぬ　前田昌子

玄関を開けると真上にたくみなく上弦の月輝きてあり

露光る枯野に映えて石蕗の花手を広げるかに我をむかへる　末永孝子

秋の陽に白きそば花咲きてより黒き実となる初霜の朝

宮の杜の高き公孫樹は夕映えて「てふてふ」となり黄葉は舞ひ散る　金丸咲子

カタールの被災地支援夕張にてうれしきニュース心暖まる

被災地にすずなりの柿手つかずにゆく末思う新春の画像　深見弘美

力無き病む友の文胸騒ぐそを握りしめ鳥居をくぐる

人里に降りくればまた追われゆく野犬の孤独をふと思いやる　町田典子

ふたり棲む小さき家の小さき庭夫植えくるるまんさくの苗

子等の空ひろがりてゆく新年に陽の降りそそぐよう柏手を打つ　下條八知子

青空に黄葉のトンネル吹き寄せし銀杏の並木ここ御堂筋

期待した歳末くじは当たらずに地下街ぬける風は冷たし